2020年6月掲載
2023年5月更新

災害看護学を専門に「実践力と研究力をそなえた看護職者」を目指し、
世界中の女性と子どものよりよい人生を願う助産師

いけもと
池本 めぐみ

国際医療協力局人
材開発部 研修課助
産師、看護師

★略　歴

2000　神戸市看護大学短期大学部第一看護学科卒業
　　神戸市立西医療センター 救急・ICU病棟（看護師）
2003　アメリカ、イギリス 語学留学
2004　中正会 中林病院 外来透析室（看護師）
2007　新潟大学医学部保健学科看護学専攻卒業（助産師、保健師免許取得）
2009　福岡市立こども病院 感染症センター 循環器・神経外来（看護師）
2011　福岡赤十字病院 産婦人科病棟（助産師）
2015　兵庫県立大学大学院博士課程
　　災害看護グローバルリーダー養成プログラム（DNGL）入学 （2020年9月修了）
2017　WHO健康開発総合研究センター（リサーチアシスタント/インターン）
　　Advanced Life Support in Obstetrics (ALSO)の研修を受講、プロバイダー認証取得
　　国際緊急援助隊　医療チーム 看護師登録
2018　H.E.L.P.(Health Emergencies in Large Populations) Training course 修了
2020　国立国際医療研究センター 国際医療協力局入職（助産師）
2021　JICA モンゴル国 医師及び看護師の卒後研修強化プロジェクト 長期専門家

★過去の主な担当業務

JICA課題別研修 2019年度医療関連感染管理指導者養成研修
JICA課題別研修 2020年度アフリカ仏語圏地域 女性と子どもの健康改善
JICAモンゴル事業 看護新人研修

★現在の主な担当業務

保健システムチーム
保健人材開発に関する研究

池本さんが、看護師を目指したきっかけを教えて下さい。

私は、淡路島出身です。1985年に大鳴門橋、2000年に明石海峡大橋が開通するまでは、完全に“島”であり、“島外”に出るために船に乗る必要がありました。小さい頃の私には、徳島、神戸、大阪がとても大きな都会でした。その都会に、家族が定期的に通うのです。祖父の胃潰瘍の治療や手術のため、父の足の治療のため、母の股関節の手術とその後の管理のため・・。私は、子どもながらに島外の大きい病院に行けば、どんな病気も治してもらえる医師と、優しくかっこいい看護師がいるのだと思っていました。そんなある日、中学生の私は神戸に入院している母の見舞いに行きました。母はI看護師が、母の安楽・清潔を考えてケアしてくださった話をしました。母は、とてもうれしそうに「こんな風に誰もしてくれへんよ。Iちゃんだけやわ」と言いました。こんなにうれしそうな母を見るのは久しぶりでした。私は、患者さんがつらい日も、前向きに生きようとする日も、いつもそばにいるのが看護師だと気づきました。そして、私もいつか人の痛みを少しでもわかり、そっと支え、その人にあった看護ができる看護師になりたいと思うようになりました。

池本さんは今年(2020年)の1月に国際協力局に入職されましたが、それまでのキャリアを教えてください。

1）看護師としての臨床経験

2000年神戸市西医療センターに就職し、救急・ICU病棟で働きました。当院は、1995年の阪神淡路大震災で被災した病院です。私は、先輩方が作成してくださった看護技術のチェックリストを手に、必死に実践と学びを繰り返し、救急看護や重傷ケアを身につけました。また患者さん、ご家族、同僚や先輩看護師、医師などすべてのかかわりの中で、自分の看護観の基盤が形成された時期です。

臨床での助産師時代

2）語学留学

国内外で助産学・ウィメンズヘルスを専攻し、学士を修得することを目指し、その可能性を広げるために、2003年にアメリカとイギリスに9か月間の語学留学をしました。私は、英語を学び、文化を知り、友に出逢い、時には、価値観の違いで生じる問題を討論しました。この経験は、英語を学ぶだけではなく、お互いの違いを尊重し、理解しようとする姿勢や人を想う大切さを、身をもって感じることにつながりました。

3）大学への編入学

いろいろな道を模索した結果、国内の大学に編入学し、学士・助産師・保健師を取得することにしました。そして、2005年新潟大学医学部保健学科に編入学しました。そこで私の人生に大きく影響する出逢いがありました。今は亡き新潟大学の国際看護の教授である丹野かほる先生です。丹野先生は、偶然に私と同じ淡路島の出身で、助産師で、エジプトやミャンマーでのご経験があり、何よりも世界中の女性の命やよりよい生活のために生きていらっしゃいました。どの活動の話をされる時にも、人への愛情にあふれていました。ある日、丹野先生は「私のゼミの学生がNCGMの病院に就職したのよ」と嬉しそうに話してくださいました。私は、その時にNCGMの存在を知りました。丹野先生との出逢いと経験のひとつひとつが、国際協力への関心を深めていくものでした。

4）助産師としての臨床経験

私は、大学卒業後4年間、福岡赤十字病院で、産婦人科病棟で助産師として働き、妊娠・分娩・産褥期のケアを通し、多くの女性・ご家族と出逢いました。産婦人科では、お産や妊娠経過、家族背景、緊急を極めた病態など十人十色で、女性の人生そのものがあらわれます。ある褥婦さんに、はじめて受け持ち助産師として挨拶しに行った時に、「あの時、私の服を切っていいかと夫にたずねてくださっていた方ですね。私は、あなたがいてくれるならもう大丈夫だと思えました。」と言われました。10日ほど前、彼女とおなかの中の赤ちゃんが一刻を争う危険な状況でした。私は、彼女に意識がないと思っていましたが、あの時の私の声が聞こえていたのです。そして、その声が彼女を励まし、彼女は、生きるんだと思えたそうです。看護には、こんな力があるのです。

5）大学院への入学

2015年4月に兵庫県立大学大学院の5年一貫博士課程の災害看護グローバルリーダー養成プログラム（DNGL）に入学しました。大学院では、常に「実践力と研究力をそなえた看護職者」を目指し勉強しました。国内外での学会や国際会議等での発表を積極的に行い、災害関連では、研修などに参加し、災害看護専門看護師とNPO法人Both-AIを立ち上げ、防災減災のために活動していました。また、東日本大震災、西日本豪雨などの被災地支援をし、被災地での活動には、常に「人々の真のニーズに添い自立を促し、生きる力をそっと支え、よりよい人生や生活につなぐ」という視点を持つことが不可欠であると考えるようになりました。

大学院時代 ５大学の学生と国際学会で

国際医療協力局に入職したきっかけ、理由、決めてを教えてください。

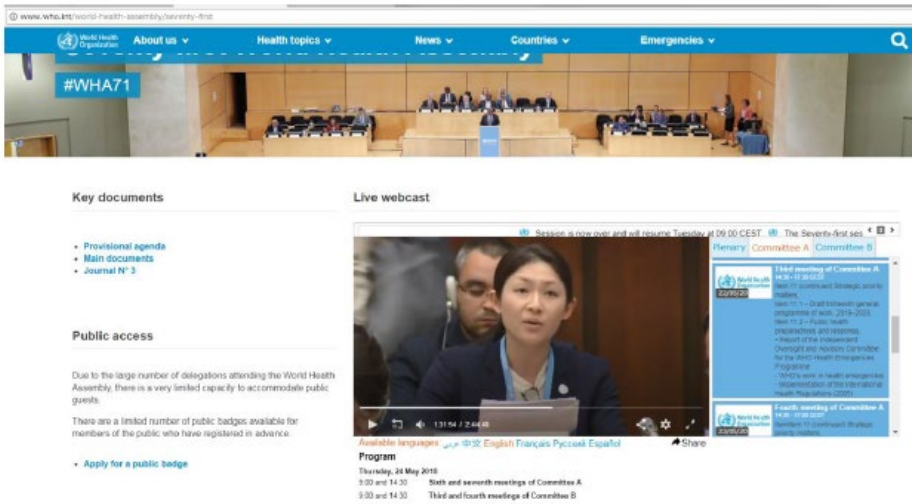
大学院在学中に国際的な経験をしました。WHO健康開発総合研究センターでの経験です。スーパーバイザーである茅野龍馬医官の講義や活動への同行、国際学会でのポスター発表、ASEAN各国の研究者への研究に関するイベント等に参加させていただきました。また、WHOのイントラネットでエリザベス・イロ氏がチーフナーシングオフィサーに就任したことを知りました。、看護は人々のケアやUHCの実現に重要な役割を果たす大切な職業であることを再認識しました。そんな時、国際看護師協会（ICN）がはじめて世界保健総会（WHA)に協会加盟国の学生から成る学生団を派遣することを知り、応募することにしました。そして、日本の学生の代表として参加しました。そして、参加したランチョンのイベントに、エリザベス・イロ氏がいました。もう、心の中は大騒ぎです。クックアイランドの看護政策に大きな影響を与え、UHCの実現に向けて大きく寄与されている看護職の代表が目の前にいたのです。それから数日間、看護の情報発信ブースのお手伝いやフロアーでの交流などエリザベス・イロ氏やICN関連の方々と過ごすことができました。看護でつながる一体感から私たちは、世界が看護でつながっていると確信しました。また、私は、ICNの代表としてWHOや各国政府に向けPublic health preparedness and responseの会議で発言しました。これらの経験から、世界中の健康問題がどのように扱われ、議論・採択され、各国に持ち帰り、政策に反映していくのかを学ぶことができました。
国際的な大きな流れを理解し、戦略的に「女性やこどもの生活や人生をよりよいもの」につないでいく必要があることを感じました。でも、私は現場や実践、人が好きです。この両方に関わることができる仕事は何かと考え、国立国際医療研究センターの国際協力局に辿り着いたのです。

ICNの看護学生団 エリザベス・イロ氏と

エリザベス・イロ氏 WHAの情報発信ブースで

入職後の、仕事と今後の展望を教えてください。

2020年１月に国際協力局に入職しましたが、入職直後は、研究推進ための研究費申請の支援や研究費管理すること、JICA課題別研修「2019年度医療関連感染管理指導者養成研修」のアドバイザーを行いました。そんな中、COVID-19が発生し、さまざまなCOVID-19関連の業務に従事しました。私のバックグラウンドは、災害看護であるので、感染症の脅威や隔離に伴う人々の精神的なストレス、感染している人の人権と当事者の不安などの起こりえることが一瞬にして想像できました。また、支援者のストレスや過労の問題と支援者を支援する人が必要になっていくことも感じました。現在、COVID-19による緊急事態宣言が出ている状況ですが、私は、ひとりのスタッフとして同僚を大切に、自分のやるべきことをしたいと思っています。
今後の展望は、途上国の現場で事業に関わり、経験を積みたいと思っています。また、機会があれば、国際機関への出向し、看護行政を学びたいと思います。そして、将来的には、これらの知識や経験を活かして人材育成や研究の支援をしていきたいです。



大学院時代　国際看護師協会（ICN）の代表としてWHAで発言

2019年度医療関連感染管理指導者養成研修閉校式で
“Nursing Now”キャンペーンに参加

国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

私は、国際協力に興味を持ち、国際協力の道に入りたいと思いましたが、タイミングが合わず入れませんでした。ある日、私は自分の子どもに「大きくなったら何になりたいの？」とたずね、なりたい職業になれるように努力する大切さを話していた時、「自分は、国際協力の夢をあきらめたままでいいのだろうか」「そんな私が子どもの夢を支えることができるのだろうか」と自問自答しました。そして、もう一度だけチャレンジしようと決心しました。私は、臨床での経験、語学学校、大学院での学びなど、多くの時間を使い、遠回りをしてように見えると思います。どの時期も必死に過ごし、多くの人に力をいただいたその全てが自分の身になっています。国際協力には、人それぞれの形があります。やろうと思った日がその時だと思います。

ありがとうございました。

～フィールドは楽しい！！～

現在、モンゴル国に赴任し、助産師の卒後研修の強化に取り組んでいます。
任国に長期で滞在するということは、その国で生活し、季節を過ごし、カウンターパートや助産師のそばにいて活動するということです。活動が順調な日があれば、そうでない日もあります。ずっとそばにいるからこそ、見えてくるものがあり、「真の課題」に気づくこともありました。きっと私の人間性も感じとられていることでしょう。フィールドは、楽しいですよ！これからもモンゴルの皆さんと同じ目標を持ち、よく話し、活動していきたいと思います。
また、これらの活動は、国際医療協力局の経験豊富な先輩方、同時期に派遣されている同僚、多くの方から様々なことを学ばせていただき、相談し、実現できているのだと思います。 国際医療協力局は、そんな職場です。
（2023年5月）